

2013(平成 25)年 7 月 20 日(土)

相愛中学校・高等学校

校長 安井 大悟

終業式式辞

「夏です。思い出の一冊に出会おう」、今月号の図書室だよりの見出しです。ハワイコーナーができたこと、礼拝のときいつも歌う恩徳讃はハワイ生まれだということ…など今月号も情報満載です。

さて、一学期の終業式にあたり、今日は図書室と読書のすすめをお話して式辞にかえたいと思います。

なぜ、図書室だよりがこのタイトルになったかというと、

明日からの夏休みに、いつもと違う本を読もう！

私の中・高時代の思い出の一冊になるかもしれない！

一ヶ月以上の長期間貸出しが可能だから！

なのです。

ただ本を読み、この本は是非、あの本はどうしても読んでおくべきだ…などと決めつけられると、言われれば言われる程、本から遠のく人がいるのではないか、ましてや読書感想文の宿題つきともなると苦痛を伴うようです。私も経験あります。だから、もっと違ったお薦めにしようと思います。

私は4月1日からこの相愛に勤めましたので、中学1年生、高校1年生と同じ新入生です。校内案内は教頭先生がしてくださいました。図書室ももちろんです。

『法人理事室・同窓会室のさらに上、4F(実際には5Fらしいですね)にあり、教室棟と離れていて不便なのですよ～。生徒の利用が少ないのも、その理由があげられるかもしれませんね。』と説明つきで連れてもらいました。それから何度か、私は図書室に息を切らせながら登って通ううち、この空間が大好きになりました。

一番に静かです。教室棟と離れているからでしょう。

明るいです。高い場所にあるからでしょう。

校庭側に窓がとられ、見えるのは校舎、校庭、あなたたちの動きだけです。街の喧噪からは隔絶しています。

ソファーまであります。

私はたいそう気に入っています。取り残された存在では決してないと

思います。むしろ希有な空間でありましょう。

さて、話は変わります。

私の前任校のことは話しましたね。その平安高校に著名な作家の娘さん、そして2年後には息子さんも入ってきました。その作家、つまりお父さんは山本兼一さんといいます。2008(平成20)年、第140回直木賞作家です。「利休にたずねよ」で受賞されました。

お子様が在学中のことでしたから保護者でいらっしゃるわけで、著名作家といえども思い切って頼んでみようと図書館長と話しました。

『いいですよ』と快く引き受けてくださった文章がここにあります。

“小説は楽しい” 山本兼一

ゆっくり読みます。彼からのメッセージを受けとってください。

小説は楽しい

山本兼一

本を読むのは、楽しい。

本のなかでも、小説を読むのは、とくに楽しい。

わたしは、高校生のころ、たくさん小説を読んだ。どの本も、血となり肉となって、いまのわたしを支えてくれている。

小説を読むのが楽しいのは、ページをくついでるうちに、さまざまな人々に出会えるからだ。

世の中は広い。

いろいろな人生がある。

十代のころには、まだ、自分のまわりのほんのわずかの人間しか知らない。家族と学校の友だち、近所の人……。それがふつうである。

生意気な高校生だったわたしは、正直なところ、世の中を見くびっていた。

——たいした人間なんて、いやしない。

と、高をくくっていた。

ところが、小説を読んで、ガツンとやられた。

——世の中は、すごい。

そう感じるようになった。地平線が、いっぺん

にひろがった。

もつとも、一口に小説といっても、幅広い作品がある。

人間のこころの起伏をたんねんに追い求める文学もあれば、推理小説、歴史小説、SF小説、恋愛小説……、などなど。

また、身も心もすばらしく強い主人公もいれば、情けないくらい弱い主人公もいる。

どんなジャンルや主人公であれ、すぐれた小説に共通しているのは、人間のこころについての繊細な観察である。

すばらしい小説には、人のこころのヒダが克明に描かれている。そんな小説を読めば、ま

ちがいなく、こころが磨かれる。研ぎすまされる。

たとえば、わたしが高校生のときに好きだった梶井基次郎の『檸檬』という小説は、京都の街でたいくつな毎日に飽き飽きしていた主人公が、寺町二条の果物屋さんでレモンを一つ買い、それを、爆弾に見立てて本屋さんにおいて帰るといったただそれだけの短い話である。

その話を読んだわたしは、ほんのちよつともその見方や考え方を変えただけで、人生はいくらでも楽しくなるのだと教えられた。

人のこころは、いつも元気いっぱいとは限らない。こころだって、風邪をひくこともあれば、

くたびれて立ち上がれないときだってある。

そんなときに、J・D・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』を読んだわたしは、寂しくせつない小説の世界にどっぷりとひたること、かえって優しさに包まれた気分になった。中原中也や萩原朔太郎の詩にも、似たような効果がある。

中島敦の『山月記』、太宰治の『斜陽』、フラッツ・カフカの『変身』など、どの物語の主人公も、十代のわたしに、生きることの奥深さを教えてくれた。

あなたたちは、あと何年かすれば、まちが
いなく大人になる。

できれば、他人のこころを思いやれる素敵
な大人になってほしい。そのためには、なにより
も心に栄養を与えてやるのがいい。

小説や詩には、人生をすばらしく生きるた
めのカロリーとビタミンがいっぱい詰まっている。

どうです？この夏休み、本を借りてみませんか？